

## ●松方侯に捧ぐる二百万圓の名畫

▽▼令息幸次郎氏が英佛で蒐める

ブランドグ井ン、シモン等百万圓は

既に買取つた || 畫壇空前の企て

目下外遊中なる川崎造船所長松方幸次郎氏は約二百万圓を投じて歐洲第一流大家の名畫を購入し父侯爵に獻ずべしと、右につき松方氏と親交ある黒田清輝子は語る『これは獨り松方氏の一家の爲のみならず本邦美術界の爲に慶賀すべき珍しい美學である、私は過般歸朝した畫家

▽石橋和訓君 から傳聞したのだが松方氏が先頃英京に滞在中石橋君と同伴し彼地畫壇の諸大家を歴訪した時ブランドグキン、シモン其他の作品を價格約百万圓程買込んだが、戰時中運送不安の爲暫らく彼地に保管させてある、此他に猶百万圓を買ふ事になつて居るさうだ、英のブランドグキンは

▽近代に於て 佛のピユヴェス・ド・シャバンヌに次ぐ大家で好んで市場、労働者等に題材を取る其力強い男性的な作畫は殊に佛、米に歓迎され佛蘭西では美術館内に特に一室を劃して優待して居る程である、今度買つた繪も非常な大作で下繪から完成迄の數枚に亘つて製作順序が示されてあるさうだから絶好の参考品である、佛のシモンは大陸聯合畫會の會頭を勤める第一流の

▽畫家である これ等の諸作品はいづれも彼地の博物館に永久に保存されるやうな傑作で今日の如き時節だからこそ本邦に持つて來られるのだ、尙松方家では令兄正作令弟乙彦氏共に美術の愛好者でブラングキンの油繪、エツチング等を數點所藏されてゐる』

『東京日日新聞』大正七年二月一日

明治の元勳、松方正義（一八三五―一九二四年）の三男で川崎造船所の社長をつとめた松方幸次郎（一八六五―一九五〇年）による、いわゆる松方コレクションについての談話。本文献では美術館についての構想は未だ語られていないが、一カ月後の大正七年三月二十五日付『時事新報』には、東京と神戸に美術館を建設してコレクションを公開する旨が報じられている。翌大正八年一月二十八日の黒田の日記には、美術館建設のため松方らとの相談会が催されたことがみえるが、『黒田清輝日記』第四卷、昭和二年の金融恐慌に発する川崎造船所の経営危機にともない、その計画は頓挫することとなった。松方コレクションについては、湊典子「松方幸次郎とその美術館構想について」（『MUSEUM』三九五・三九六、昭和五年二月）を参照。

なお黒田はパリへ留学したばかりの頃に、松方幸次郎の兄で当時日本公使館の書記生だった松方正作（一八六三―一九四五年）の世話になっており、また大正四年には父松方正義の肖像画（焼失）を制作している。隈元謙次郎『黒田清輝』（日本経済新聞社昭和四二年六月）を参照。